様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：３４３０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２０４７

研究課題名（和文）存在論及び因果論をめぐる仏教徒とジャイナ教徒の対論

研究課題名（英文）Dialogues between the Buddhists and the Jainas regarding ontology and causality

研究代表者
志賀　浄邦（SHIGA, Kiyokuni）

京都産業大学・文化学部・教授

研究者番号：６０４４０８７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：ダルマキールティ以降の仏教論理学者たちが紹介するジャイナ教学説を分析して複数の要素に分け、論師ごとに精査した結果、カルナカゴーミンの前後である変化が起こっていることが判明した。彼に先行するアルチャタやシャーンタラクシタ、カマラシーラの所説と比較すると、元々個別に紹介されていた複数の見解・学説が、カルナカゴーミンの時代に編集・パッケージ化され始め、ジターリの時代に完成されたという流れを想定することができる。また実体と様態をめぐるジャイナ教徒と仏教徒の対論を歴史的に概観すると、ダルマキールティを除く仏教論理学者のうち後代のジャイナ教徒たちによって最も頻繁に引用・批判されるのは、アルチャタである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の独創的な点は、仏教論理学者アルチャタとジャイナ教論理学者の関係性を明らかにしようとした点である。従来アルチャタは、ディグナーガに始まる仏教論理学派の一論師として研究されることが多かった。しかしながら、アルチャタ自身が存在論に関するジャイナ教学説を紹介している点や、後代のジャイナ教徒がアルチャタを主要な対論者の一人と見なしている点からも、アルチャタとジャイナ教徒の間には長きに渡る論争の歴史が存在したと考えられる。存在論をめぐるアルチャタとジャイナ教徒の論争の様相とその経緯を明らかにすることにより、インド哲学における存在論の総合的理解に新たな視点と知見を提供することができたと考える。

研究成果の概要（英文）：Having examined the Jaina doctrines introduced by the Buddhist logicians after Dharmakirti, it became clear that there was some change around the time of Karnakagomin. When we compare his statements with those by Arcata, Shantaraksita, and Kamalashila, who preceded Karnakagomin, we can say that several views that were introduced separately by each logician came to begin to be collected, edited, and packaged at the time of Karnakagomin, and were regarded as a single doctrine at the time of Jitari. It was Arcata's Hetubindutika that was cited and criticized by later Jaina logicians when we overview the dialogues between the Jainas and Buddhists with regard to substance and mode historically.This fact suggests that Arcata is not only one of the eminent and influential logicians inside Buddhism, but also he is such an worthy and tough opponent to the Jainas.

研究分野：仏教学

キーワード：ジャイナ教　多面性実在論　アルチャタ　カルナカゴーミン　サマンタバドラ　クマーリラ　ダルマキールティ　ジターリ

１．研究開始当初の背景

紀元前５世紀頃の古代インドにおいて、ほぼ同時期に成立した仏教とジャイナ教という２つの宗教はともに、物事を認識し思考・判断する際の合理性や客観性を重んじ、後に高度な認識論・論理学の体系を構築した。両宗教の論理性重視の淵源は、仏教の開祖ゴータマ・ブッダの説いた縁起思想や因果論、またジャイナ教の開祖マハーヴィーラが説いた相対的思考法にも求めることができる。一方、両者はそれぞれ独自の教義や世界観を保持していたため、存在論・因果論等については互いに大きく異なる学説を構築することとなる。

研究代表者は、2013 年に発表した拙稿（Conflicts and Interactions between Jaina Logicians and Arcaṭa、『ジャイナ教研究』19、pp. 19–68.）（志賀 2013）において仏教論理学者アルチャタ（８世紀）とジャイナ教思想との関係について論じたが、その後半部で、アルチャタが『論証因一滴論注（*Hetubinduṭīkā*）』において紹介するジャイナ教独自の存在論とそれに対する彼自身の批判について考察した。事物の存在の仕方に関してジャイナ教徒は、あらゆる事物は「実体」と「様態」という二つのあり方で存在すると主張する。彼らはさらに、ある事物（例：つぼ）における、「実体」（例：原材料としての粘土）と「様態」（例：完成したつぼの色）は、その数・呼称・特徴・目的等が異なることから相互に異なる一方で、両者の存在する場所と時間、またその本質が同一であるため、相互に異なることもないと述べる。このジャイナ教の存在論は「多面的実在論」と呼ばれる。アルチャタ以前に登場し、仏教内外に多大な影響を与えた仏教論理学者ダルマキールティ（７世紀）が確立した実在の定義は、「効果的作用（目的の実現、因果効力）をなす能力をもつこと」であったが、彼以後の仏教徒の存在論はこの定義に依拠して構築されることとなる。アルチャタもダルマキールティに従って、ジャイナ教徒の見解を、単一の事物に２つ以上の相反する性質が存在することは不可能である他、そもそも本質のレベルで実体と様態の間に違いがないとすれば、数や呼称等による違いもありえないと批判する。

２．研究の目的

本研究の目的は、上記拙稿において得られた研究成果をさらに深化・発展させ、存在論及び因果論をめぐる仏教徒とジャイナ教徒の対論を総合的に明らかにすることであった。具体的には、アルチャタによる唯一の現存する著作『論証因一滴論注』におけるジャイナ教学説の紹介部分とそれに対する批判部分、またその直後に現れる要約偈（４５偈）のサンスクリット・テキストを写本にもとづいて批判的に校訂するとともに、正確な現代語訳（英訳）を作成することであった。また当該箇所は、後代のジャイナ教諸論書において繰り返し引用され、アルチャタの批判に対してジャイナ教徒からの再反論も行われている。そのため、これらの引用断片は、『論証因一滴論注』のテキスト校訂の際に欠かせない資料となるとともに、アルチャタ以後のジャイナ教思想がどのように展開したかを知るための貴重な情報源でもある。さらに、アルチャタの他、シャーンタラクシタ（８世紀）、カマラシーラ（８世紀）、カルナカゴーミン（８世紀）、ジターリ（１０世紀）、ドゥルヴェーカミシュラ（10－11 世紀）等の仏教論理学者もジャイナ教の多面的実在論を紹介し、それぞれ異なった視点から批判を加えている。これらの仏教論書に見られるジャイナ教徒との論争を、アルチャタの事例と比較しつつ考察することも本研究課題の目的であった。

３．研究の方法

(1)ダルマキールティによる『論証因一滴論』とアルチャタによる『論証因一滴論注』に見られるジャイナ教学説とそれに対する批判、(2)『論証因一滴論注』に対するドゥルヴェーカミシュラによる復注の調査、(3)『論証因一滴論注』の所説を引用するジャイナ教文献の調査と解読、(4)その他の仏教論書に紹介されるジャイナ教学説とその批判との比較という４つの主題について、思想研究と原典研究を並行して進めた。思想研究の基盤となるのは、サンスクリット語原典及びチベット語訳テキストの厳密かつ正確な読解である。原典研究の対象とした主な文献は、『論証因一滴論』『論証因一滴論注』『論証因一滴論復注』『真理綱要』等の仏教文献と『論理の決定注解』『生起等の確立』等のジャイナ教文献である。

上記の４つの主題それぞれについて、①原典研究と②思想研究、すなわち①対象となるサンスクリット語テキストを校訂・解読しその内容を正確に理解すること、②ジャイナ教徒がいかなる存在論・因果論を主張したか、またアルチャタをはじめとする仏教徒はジャイナ教徒をどのような思想的立場から批判したかについて考察すること、という二つの側面からのアプローチによって研究を進めた。サンスクリット語原典の校訂及び翻訳は、根気と時間を要する作業であるが、厳密な原典研究なしには精度の高い思想研究は望めない。研究の基盤となる正確な校訂及び翻訳を完成させることを第一の目標とし、思想を考察する際も常に原典に戻ることを心掛けた。

また本研究を効率的に進めようとする際、大きな役割を果たすのは、テキスト間の相互参照や用例検索を可能にする電子テキストである。仏教論理学関連の文献は電子化が進み、ほぼ全て著作の電子テキストが利用可能であるが、ジャイナ教関連の文献については、著作の数と量が膨大であることもあり電子テキスト化は進んでいない。この状況を改善するべく、少なくとも本研究で扱う文献の該当箇所については入力作業を完了させた。

４．研究成果

あらゆる事物には「実体」と「様態」という二つの側面があり、事物はそれら二つの観点に応じて認識・理解されるというジャイナ教独自の哲学理論は、聖典期から論理学期への移行期にかけて徐々に体系化されていくことになるが、後に「多面的実在論」としてジャイナ教内外で認知されるようになり、やがてジャイナ教学説の中心的思想となっていった。ここで注意しておきたいのは、実体と様態に関わるこの学説が存在論レベル（存在のあり方）と認識論レベル（存在の捉え方・認知の仕方）の両レベルに関わるという点である。そして実体と様態の理論を中心とするジャイナ教の存在論及び認識論は、クンダクンダ、ウマースヴァーティ、シッダセーナ等によって理論化・体系化され、他学派からの思想的影響を受けつつも、自派内で独自の発展を遂げた。同学説はサマンタバドラ（７世紀頃）以降のジャイナ教論師たちにも継承され、さらに体系化が進む。アカランカ（８世紀頃）以降は、ディグナーガ・ダルマキールティによって確立された仏教論理学・認識論（プラマーナ論）の影響が大きくなるが、仏教徒にとって刹那滅論証が最重要の論証課題となったのと同じように、「あらゆるものは多面的である」という命題の論証はジャイナ教論師たちにとっても必須のものとなっていく 。ある単一の実在に複数の本質が共存すると主張する「多面的実在論」は他学派による批判の的となるが、最初に学派名を挙げて明示的な批判を行ったのはダルマキールティであろう。その後も、アルチャタ、シャーンタラクシタ、カマラシーラ、カルナカゴーミン、ジターリ、ドウルヴェーカミシュラと、主にダルマキールティの注釈者たちとジャイナ教論師たちの論争の系譜は続いていく。

研究代表者は以前に（志賀 2013)、アルチャタが紹介・批判するジャイナ教学説について考察したが、その後も研究を継続した結果明らかになったのは主に以下のような点である。アルチャタが『論証因一滴論注』の中で紹介するジャイナ教学説は、数・名前・特徴・結果の違いにもとづいて実体と様態の差異を、場所・時間・本質の同一性にもとづいて実体と様態の同一性を主張するものであったが、これはサマンタバドラ、さらにはクンダクンダに遡ることができる。『論証因一滴論注』に見られるジャイナ教学説の紹介とそれに対する批判は、ジターリの『ジャイナ教の見解の考察』に継承された。そこでは同学説の典拠としてサマンタバドラの『聖人の考究』から２偈、クマーリラによる『シュローカ・ヴァールティカ』から１偈（いずれも細部の違いを含む）が引用されている。このことはアルチャタ及びジターリの批判対象がサマンタバドラであったことを示唆する。またシャーンタラクシタ、カマラシーラは同内容の学説をジャイナ教徒ではなくクマーリラに帰すものの、『真実綱要』にも同内容の偈を見出すことができる。アルチャタによるジャイナ教批判の肝は、単一の実在に二つ以上の相反する性質が存在することはありえないこと、もし実体と様態の間に本質的な違いがなければ両者が異なることはありえないという点を指摘するものであった。さらにアルチャタは、実体と様態の差異の根拠（数・名前等）と両者の同一性の根拠（場所・時間等）についても逐一批判を行う。アルチャタによるジャイナ教批判は、後代のジャイナ教論師たちに大きな影響を与えた。特に、ヴァ―ディラージャスーリによる『ニヤーヤヴィニシュチャヤ・ヴィヴァラナ』、ヴァ―ディデーヴァスーリによる『スヤードヴァーダラトナーカラ』、チャンドラセーナによる『ウトパーダーディシッディ』、マラヤギリによる『ダルマサングラハニー・ティーカー』においては『論証因一滴論注』の所説が原文に忠実に引用され、それらに対する批判がなされている。

さらに、ジターリをはじめとする後代の仏教論理学者たちに頻繁に引用される、『聖人の考究』第 59 偈に注目し、それとほぼ同じ内容を含む『シュローカヴァールティカ』「森論」章における偈の比較対象を行って両者（両テキスト及びサマンタバドラとクマーリラ）の関係性について考究した。その際に立てた仮説は以下の通りである。『聖人の考究』第 59 偈は、カルナカゴーミン、ジターリ、ドゥルヴェーカミシュラ等の仏教徒やニヤーヤ学派のバーサルバジュニャ（『ニヤーヤブーシャナ』）によって、ジャイナ教徒の見解として引用されるが、ジターリの『種概念の否定』においては「ジャイナ教徒とミーマーンサー学派」の見解として引用されている。さらに『種概念の否定』の記述に従えば、普遍と特殊（あるいは実体と普遍）の関係性に関するジャイナ教徒とミーマーンサー学派の存在論は類似している他、サーンキヤ学派の存在論も類似した構造をもつとされる。シャーンタラクシタ、カマラシーラは『真実綱要』及び『真実綱要細注』において『聖人の考究』第 59 偈を引用しない。一方でシャーンタラクシタは『聖人の考究』第 59 偈と内容的にほぼ一致する『シュローカヴァールティカ』「森論」第 21・22 偈を前主張として紹介しているが、カマラシーラはこれらの偈をクマーリラに帰している。カルナカゴーミン以後の仏教論師たちは『聖人の考究』由来の３偈（第 59、60、57 偈）もしくは２偈（第 59、60 偈）の間（第 59 偈と 60 偈の間）に『シュローカヴァールティカ』「森論」第 23 偈を挿入するが、その理由は明らかではない 。

『聖人の考究』と『シュローカヴァールティカ』の並行箇所について、一語一語の対応関係を精査した結果、『聖人の考究』の記述より『シュローカヴァールティカ』の記述の方がより説明的で詳細であることが判明した。しかしこのことのみから、サマンタバドラ（『聖人の考究』）とクマーリラ（『シュローカヴァールティカ』）の前後関係を確定することは難しい。一方、ジャイナ教側の資料ではあるものの、ヴァーディラージャスーリによる記述に従うなら、クマーリラが『聖人の考究』の当該箇所を参照したか、あるいは何らかの形でそれに影響を受けた可能性、さらにそれを容認・再構成した上で自派の説とした可能性などを想定することができる。

ところで、ダルマキールティ以降の仏教論理学者たちにとって、「ジャイナ教学説」とはどのようなプロセスで形成されたのであろうか。仏教徒としての立場・見解を共有する仏教論理学者たちの中でも、ジャイナ教学説の捉え方、編集・紹介・再現の仕方には変遷があると考えられる。そこで、仏教論理学者たちが紹介するジャイナ教（ミーマーンサ学派）の学説を便宜上いくつかの要素（型、モデル）に分けてその変遷を考えてみた。さらに、仏教論理学者たちが頻繁に用いる、「ジャイナ教徒とミーマーンサー学派によって述べられる」という表現についてその理由と背景について再検討を試みた。まず最初に大枠として、「I. 存在の三形態モデル」と「II. 実体と様態モデル」の二つのモデルを設定した。「I. 存在の三形態モデル」とは、「存在は、生起・存続・消滅という三つの性質を有する」という考え方のことである。このモデルを、人間の悲しみや喜び等の感情や行動と関係するか否かという視点から、さらに「A. 人間の感情・行動との連動」（I－A 型）と 「B. 人間の感情・行動との非連動（連動に関する記述なし）」（I－B 型）に、またある一つの存在を普遍（実体）として「存続」する側面と、特殊（様態）として「消滅」「生起」する側面という二つの観点から捉える「C. 二観点導入型」（II－C 型）に分けた。次に「II. 実体と様態モデル」、すなわち「あらゆる事物は実体と様態という二つの側面を有する」もしくは「あらゆる事物は実体と様態という二つの観点から認識・理解することができる」という見解もしくはそれを含むパッセージまたは著作を、やはり便宜上、「A. 二性質併存型」（II－A 型）、「B. 実体と様態の異・不異型」（II－B 型）、「C. 一致と相違／随伴と排除型」（II－C 型）の三類型に分けた。その結果、ジャイナ教学説を紹介・批判する仏教論理学者のうち鍵となる人物はカルナカゴーミンであることが判明した。彼以前に活動したと考えられるアルチャタ、シャーンタラクシタ（カマラシーラ）が言及する類型と比較してみると、その違いは明らかで、彼の時代に何らかの変化が起こったことを推測できる。注目すべき点は、アルチャタが II－B 型を紹介する一方で I－A 型には全く触れていないことと、シャーンタラクシタ及びカマラシーラにはそれら両方が見られるものの、I－A 型についてはジャイナ教徒ではなくクマーリラに帰せられているという点である。

カルナカゴーミンは仏教論理学者の中で最初に『聖人の考究』第 59、60、57 偈を引用し、明示的にそれらを「ジャイナ教徒空衣派」の見解であるとした人物であるが、II－B 型について言えば、彼はアルチャタやシャーンタラクシタに見られるような差異・不差異の具体的論拠に言及することがない。その後、ジターリは６類型全てに触れるが、これは彼以前の仏教論師たちの見解を受けてのことであろう。

以上のことから、以下のような仮説を立てることができる。カルナカゴーミン以前の時代、おそらくサマンタバドラあるいはそれ以前に遡ることができるジャイナ教学説は、仏教学説に対する前主張（反論）として個別に記録されたり、引用されたりしていたが、カルナカゴーミン以後、それらを「編集」もしくは「パッケージ化」する作業が開始され、ジターリの時代にそれが完成に至った。ジターリは『ジャイナ教徒の見解の考察』において、元々別の系統で伝わっていた I－A 型と II－B 型を統合し、それらをあたかも元々一連の学説であったかのようにパッケージ化した。これにはカルナカゴーミンの影響が考えられる。カルナカゴーミンは、彼以前の時代はおそらく別々に伝えられ紹介されることの多かった I－A 型と I－B 型を結びつけた最初の人物である。シャーンタラクシタが I－A 型のみをクマーリラ説として触れる一方、アルチャタは I－B 型のみに触れているという事実はこのあたりの背景を示唆している。さらにカルナカゴーミンは『聖人の考究』から数偈を引用する際、全ての偈を同書から引用するのではなく、間に『シュローカヴァールティカ』からの偈を一つ挿入した。これについては、彼がサマンタバドラとクマーリラがほぼ同内容の一連の偈を製作していた（または両者が類似の存在論を共有していた）ことを認識しており、そのことを踏まえて両者を統合し、一つの前主張としてパッケージ化したと考えることができる。そこには、読者の理解を補うために編集しようという意図や、両学派を一度に批判しようとした意図などを想定することができるかもしれない。

一方、ジャイナ教側で鍵となる人物はサマンタバドラである。彼も II－C 型については微妙であるものの、六類型全てに言及しており、仏教側のカルナカゴーミンやジターリとほぼ同じ結果を示している。一方、サマンタバドラに見られる類型をおそらく彼に先行すると考えられるクンダクンダやシッダセーナ、ウマースヴァーティのそれらと比較すると、サマンタバドラが I－A 型と I－B 型の両方を主張する一方で、クンダクンダ他は I－A 型に触れない。そして I－A 型はクマーリラと共有されている。これらのことから推測すると、サマンタバドラが自派の思想体系を形成していく中で、他学派の思想的影響を受けながらそれまでにはなかった要素を導入したということができるのではないだろうか。報告者は、サマンタバドラとクマーリラの間の思想的影響関係について、両者のうちいずれか一方が先行し、もう片方がそれを参照した可能性以外に、ほぼ同時代に活動した両者が何らかの先行する思想的ソースを共有しており、そこから着想をえた可能性もあるのではないかと考えてきた。サマンタバドラとクマーリラの両者が影響を受けたと考えられるものの一つとして、文法学派（例えば『マハーバーシャ』）やサーンキヤ学派（例えば『シャシュティタントラ』）の思想を挙げることができるであろう。

最後に本研究を通して得られた結論をまとめると、以下の通りとなる。

(1) ダルマキールティ以降の仏教論理学者たちが紹介するジャイナ教学説を６つの要素に分け、論師ごとにそれぞれの有無を精査した結果、カルナカゴーミンの前後で変化が起こっていることが判明した。彼に先行するアルチャタやシャーンタラクシタ、カマラシーラの所説と比較す

ると、元々個別に紹介されていた複数の見解・学説が、カルナカゴーミンの時代に「編集」「パッケージ化」され始め（例えばI－AとI－Bの統合）、ジターリの時代に完成された（I－AとII－Bの統合）という流れを想定することができる。なお、カルナカゴーミンがサマンタバドラを知っていたことは確実であるが、全面的に彼の説を引用しているわけでない。またサマンタバドラ以前の論師の説を直接参照した可能性も考えにくい。『聖人の考究』由来の偈と『シュローカヴァールティカ』由来の偈を組み合わせて一連の見解として「編集」した最初の人物もカルナカゴーミンであったと考えられる。

(2) 『聖人の考究』第59偈と『シュローカヴァールティカ』「森論」第21〜23偈がほぼ同内容であることについては、テキスト自体の比較結果とヴァ―ディラージャスーリの言明に従えば、『聖人の考究』が『シュローカヴァールティカ』に先行し『シュローカヴァールティカ』に影響を与えたということになる。しかしながらより俯瞰的な視点から見た場合、両者が共通の先行するテキストや思想に影響を受けた可能性も考えられる。具体的にはパタンジャリの『マハーバーシャ』やバルトリハリの『ヴァーキヤパディーヤ』の影響を想定することができる。その他、感情との連動についてはサーンキヤ学派の思想の影響を受けた可能性もある。またクンダクンダやシッダセーナなど、サマンタバドラ以前のジャイナ教論師の著作にはI－A型が見られないことから、サマンタバドラが他学派の思想的影響を受けつつ、それまでにはなかった新たな要素を導入したと推測することも可能である。

(3) 実体と様態をめぐるジャイナ教徒と仏教徒の対論を歴史的に概観すると、ダルマキールティを除く仏教論理学者のうち、後代のジャイナ教論師たちによって最も頻繁に引用され批判されるのは、アルチャタである。アルチャタは45の偈文を含む長大なジャイナ批判を展開するが、その批判は複数のジャイナ教論書において引用され批判されている。そのうち、ほぼ全体をカバーし、かつ内容的にまとまりのあるものはマラヤギリによる『ダルマサングラハニー・ティーカー』である。他の著作と比較しても、アルチャタ説を的確に批判した上でジャイナ教徒の立場を鮮明に提示している。マラヤギリの主張の中核となっているのは、「異かつ不異」「相互に混じり合うこと」「さらなる別種のものであること」などの概念である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計６件）

①志賀　浄邦、How to deal with future existence: *sarvāstivāda*, yogic perception, and causality、*Journal of Indian Philosophy*、査読有、第46巻、2018年、pp. 437–454
DOI: 10.1007/s10781-017-9344-0

②志賀　浄邦、Problems concerning *Āptamīmāṃsā* 59、印度学仏教学研究、査読有、第65巻第3号、2017年、pp. 1122–1129

③志賀　浄邦、*Tattvasaṃgraha* および *Tattvasaṃgrahapañjikā* 第21章「三時の考察(Traikālya-parīkṣā)」校訂テキストと和訳(kk. 1809–1855)、インド学チベット学研究、査読有、第20号、2016年、pp. 76–130

④志賀　浄邦、台湾仏教・慈済会による慈善活動とその思想的基盤―菩薩行としてのボランティア活動と「人間仏教」の系譜―、京都産業大学日本文化研究所紀要、査読有、第21号、2016年、pp. 48–103
https://ksu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1652&item_no=1&page_id=13&block_id=21

⑤志賀　浄邦、An objection in the *Hetubindu* ascribed to the Jainas、印度学仏教学研究、査読有、第64巻第3号、2016年、pp. (213)–(220)

⑥志賀　浄邦、*Tattvasaṃgraha* および *Tattvasaṃgrahapañjikā* 第21章「三時の考察(*Traikālya-parīkṣā*)」校訂テキストと和訳(kk. 1785–1808)、インド学チベット学研究、査読有、第19号、2015年、pp. 158–209

〔学会発表〕（計８件）

①志賀　浄邦、実体(dravya)と様態(paryāya)をめぐるジャイナ教徒と仏教徒の対論：その淵源と後代における展開、第33回ジャイナ教学会、2018年

②志賀　浄邦、On some common scriptural sources cited by Ratnākaraśānti and Kamalaśīla、XVIIIth Congress of the International Association of Buddhist Studies、2017年

③志賀　浄邦、How to deal with future existence: *sarvāstivāda*, yogic perception, and causality、International Workshop: “Chance and Contingency in Indian Philosophy”、2017年

④志賀　浄邦、Arcaṭa’s description and criticism of the Jaina theory of manifoldness (*anekāntavāda*)、International Workshop at Austrian academy、2017年

⑤志賀　浄邦、*Antarvyāpti* and *bahirvyāpti* re-examined with a special reference to *bāhyārthopasaṃhāra* advocated by Dignāga 、Indo-Chinese Cultural Relations through Buddhist Path of Transcendence: Indian Logic and Epistemology in East Asia、2016年

⑥志賀　浄邦、*Āptamīmāṃsā* 第59偈をめぐる諸問題、日本印度学仏教学会第67回学術大会、2016年

⑦志賀　浄邦、*Hetubindu* に見られるジャイナ教徒の見解、日本印度学仏教学会第66回学術大会、2015年

⑧志賀　浄邦、存在論と因果をめぐる仏教とジャイナ教の対論、*Prajñāpāramitopadeśa* 集中研究会、2015 年

〔図書〕（計１件）
①関根　康正、根本　達、志賀　浄邦、鈴木　晋介、関西学院大学出版会、社会苦に挑む南アジアの仏教　B. R. アンベードカルと佐々井秀嶺による不可触民解放闘争、2016 年、91 (pp. 23–38、79–83 を担当)

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。